

the People

元気なまちには 元気な主張を続け
元気に行動する 市民がいる

the people (ザ・ピープル)

2014年 5月1日発行

発行：特定非営利活動法人 ザ・ピープル

代表者：吉田 恵美子

所在地：福島県いわき市小名浜字蛭川南5-6
タウンモールリスポ内

TEL：0246-52-2511 FAX：38-9538

E-mail：the-people@email.plala.or.jp

URL：http://www.iwaki-j.com/people/

3年目の春

ふくしまオーガニックコットンプロジェクトに3度目の春がやってきました。

震災後の農業再生を！と始まった、食用ではなく繊維になる作物…コットンの栽培は、農業の六次化のチャレンジとして2年間の経験の中で、深まってきました。

市内外30カ所3haほどで行われた2年目の栽培には、4,500名のボランティアの方たちが手を貸してくださいました。震災体験の風化が叫ばれる中、首都圏を始め日本各地から私たちの取り組みの為に足を運び、共に汗を流して下さる方々の存在は、私たちにとって大きな支えでした。その方たちとのコラボにより生み出されたコットンは、860kg(種付き)という収量を私たちにもたらしてくれました。

そして、今年は栽培面積はほぼ横這いの状態ですが、有機認証を受けている農家さんが新たに1名仲間に加わり、楡葉町で県の特別栽培で米作りをしていた経験を持って私たちの有機栽培のアドバイザーを務める松本公一さんを交え、3カ所4名の圃場栽培管理者が有機栽培のノウハウを持つ仲間ということになりました。4月21日には、農水省の試験場栽培研究室長、試験場長などを経て、施設園芸の普及活動を講演・新聞・雑誌等媒体として全国的に展開していらっしゃる新井和夫先生をお招きして、有機で栽培を行うことについての学習会を開催しました。現在では有機JAS認証の対象品目にさえなっていないコットンではありますが、関わる者全てにとって、自信を持って「オーガニックコットンです」と自己紹介できる日を迎えられるように、取り組みを進めていこうとしています。

収穫されたコットンは、各圃場ごとに放射線量のチェックをいわき市小名浜にある「市民放射能測定室たちね」に持ち込んでチェックを行い、問題の無い状態であることを確認した後、私たちの手で綿繰り(原綿と種とを機械を使って分離する作業)を済ませ、そのほとんどが4月になってから紡績工場へと送り出されました。この原綿が糸になり、製品になるまでにはまだまだ時間がかかります。

一方、私たちの手元に残ったコットンは、その多くがコットンベイブとして世に出ていきます。昨年は10,000体のベイブたちが全国各地に散らばり、それぞれの地で蒔かれ、花を咲かせ、私たちの元に各地生まれのコットンとして帰って来てくれました。コットンの里親として送り返して下さった方の数は60名にも上りました。いいえ、中には「グループで栽培しました」「学校で取り組みました」という方もおられ、関わって下さった方の数は私たちの想像をどれほど上回っているのか想像することもできません。帰ってくるコットンに添えられたメッセージには、全国各地の

方々のふくしまを思う気持ちが溢れていました。「私たちはふくしまを忘れません」といった一つ一つのメッセージに目を通しながら、こうしてたくさんの方々との出会いを震災がもたらしてくれたとしたら、震災も悪いことばかりではなかったと感じています。

今年からは、ベイブだけでなく、ブーケ用にコットンとコットンボールの殻を使って造花を作る手仕事も生まれ、仮設住宅に住む女性たちの新たな仕事になっています。コットンが生み出す手仕事。そこに、私たちは自分たちの目指す将来像を描いています。

ふくしまで環境に配慮した農業によって栽培されたコットン。そのコットンにふくしまで加工を加え、ふくしまから私たちのメッセージを込めて世に送り出す。皆さんのところで働いたコットンたちが役目を終えた時、ふくしまの私たちの元に戻り、私たちの手を介して繊維のリサイクルという次のステップへと移っていく。

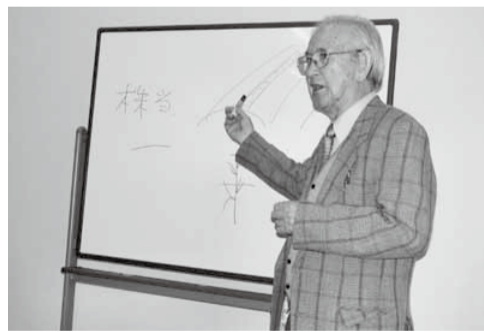
このリサイクルの輪を自分たちの手できちんと完結させるために、私たちは、手元でコットンを糸にするための工程を導入することにしました。それが、昔話でお馴染みの糸紡ぎ車であり、ガラ紡機です。

ガラ紡機とは、長野県の臥雲辰致(がうんときむね)が明治6年に発明しました。糸を紡ぐ方法は世界中に2種類しかなく、一般的にスピンドルを回転する洋式紡績と違う方法は、日本で生まれたこのガラ紡のみ。日本の産業遺産の一つです。私たちの手元にやってきたものは昭和初期生まれ。電動式ではありますが、ほとんどのパーツは木製で古めかしく、果たしてこれで糸を紡げるのかと不安がよぎるほどでした。しかし、4月23・24日に愛知大学中部地方産業研究所附属生活産業資料館で動態展示されているガラ紡機を使って、同研究所の天野武弘先生によるご指導を頂き、なかなかの優れものであることが理解できました。

自分たちで栽培し、綿繰り、カード機をかけるところまで済ませた原綿を持参し、自分たちの手でガラ紡にかけました。筒に詰める時の具合で紡ぎ出す糸の太さが変わる…という、人がきちんと整えてやらないと十分な成果を返してくれない機械です。糸自体を回転させることで糸を紡ぎます。実際に紡ぎ出すと、筒にうまく詰めれば1時間以上も糸切れすることなく薄茶色の糸を紡ぎ出してくれました。決して均一な糸ではありませんが、味のある糸が生まれました。

「ものづくりの全ての工程を自分たちの手元に！小さいけれど新しい繊維産業の形をいわきに！」そんなチャレンジのスタートラインから一歩走り出せた気がしました。

今年の栽培、製品開発にも多くのご支援を頂けることになりました。地球環境基金・住友商事ユースチャレンジプログラム・味の素冷凍食品・キリン絆プロジェクト(ふくしまオーガニックコットンプロジェクトとしていわきおてんとSUN 企業組合が助成対象)。心からお礼申し上げますと共に、有効に活用させて頂きますことをお約束させて頂きます。



つばやき いわき市は「フラガールの故郷」として全国にその名が知られている。常磐炭鉱の歴史は安政3年片寄平蔵によって石炭の地層が発見されたことに始まる。やがて国内有数の炭鉱に発展して行ったが、昭和30年代の急速なエネルギー革命により閉山。約120年間の歴史に幕を下ろし多くの炭鉱労働者は全国に散らばって行った。▼創業当時坑内から出る多量の温泉は川に流れていた。その温泉を活用し日本に居ながら常夏のハワイを堪能できる一大レジャー施設の建設に立ち上がったのが当時の中村社長である。昭和41年スタートした常磐ハワイアンセンターは全国からお客さんと呼ばれる東北屈指の人気観光スポットとなった。市内の幼稚園や子供会の遠足等は始ごころで実施された。豊富な温泉もさることながら舞台上で懸命に踊る踊り子達に誰もが感動し拍手を送った。▼昨年、映画「フラガール」のモデルとなった小野恵美子さんを描いた本が発行された。彼女は内郷の炭鉱住宅で生まれ小中学生からバレエを習い踊りが大好きな少女だった。やがてトップダンサーとして11年間舞台上に立ち続けた。結婚後も夢に向って走り続けバレエスクールを開設。子供達の育成に取り組み一方、創作フラメンコで独自の境地を開き「雪女」等の作品を次々世に発表していった。世界に羽ばたこうとしていた矢先、61歳の頃から物忘れなどの変化が現れアルツハイマーを発症してしまう。▼現在「認知症の人の家族の会」等の交流に奔走する優しいご主人の支えで静かな生活を送っておられる。いわきの克明な歴史を織りまぜながら、そこに至るまでの彼女の生きざまを綴った「小野恵美子の歳月 踊る心」を一気に読み終え深く思考せずにはいられた。私自身、主人が軽い認知症の症状が出ている事もありますが、これは思えなかった。認知症患者は今や約1千万人ともいわれ、高齢化社会と共に増加の一途を辿っている。私たちは誰もが老いと病に向き合わなければならない。その時どう向き合っていくかを示唆してくれる内容である。▼ところで先般、東京の企業から「ピープル」に仕事の依頼があった。オーガニックコットンを生かした花束づくり、その内の2種類のパーツ作りを任せられた。作り方の説明と材料の配付に飛び回る日々。市内の福祉センターに通うデイケアの皆さんや、若者サポートステーションのジョブトレーニングの一つとしても取り組んで頂ける事になった。皆さんの「仕事すること」に生き甲斐を感じます。この言葉を聞くと忽ち感動し直ぐ走り出す。何事も私のお節介やきの虫が動き出したことなのだが、会う人毎に「踊る心」読んだ？と声を掛けてしまうし、各施設を回って「この仕事やってみませんか」となる。「出しゃばり」と言われそうだが自分が感動した分そのまま伝える生き方が私の使命なのかも?と咳く、昨今である。(甘)